

1 2 . 大迫 順平氏（九州朝日放送株式会社 取締役）

「チャレンジする、できるまちへ。そして、市民が誇りを持って成長できるまちに。」



大迫 順平（おおさこ じゅんぺい）

北九州市出身。

九州朝日放送(株)に入社後、ANN ソウル特派員、「アサデス。KBC」プロデューサーを経て、社長室長、総合編成局地域共創 GP 兼社長室地域戦略担当を歴任。

2021 年に取締役、2023 年 4 月から地域共創、経営企画、人事労務担当。

北九州支社でも勤務経験あり。

「ソフトによるものづくり産業の変革を」

北九州市で 18 歳まで育ちましたが、「無いものは無い」都市だと思います。やはり、ものづくりがしっかりあるのが強みでしょう。福岡市とついつい比較してプライドを持ってないと言われますが、「北九州に生まれてよかった」とプライドを持てるようなまちに、今後変わっていくことができる可能性は十分にあるのではないのでしょうか。

強みである「ものづくり」について、今やソフトで動く時代です。ソフトを意識し、強い産業へと変貌・成長させていく必要があります、強い企業が必要です。国内外トップの IT 企業などと組むことによって、世界に誇れるようなソフトを創造して行ってほしいと思います。また、将来の発展に向けては、新しいソフト企業の誘致や育成を通じて、自身のまちの企業で働き、稼ぐという視点が必要になります。

その素地はあると思いますので、九工大や高専など教育機関を生かしながら理系に強い人材を育てていくことが大事です。

チャレンジできる環境やそれらを支える子育て政策を打ちだしているのです、今後ももっとチャレンジできるようなまちづくりを期待します。

「スポーツによるシビックプライドの醸成」

「ギラヴァンツ北九州」に代表されるように、短期的にはスポーツ強化はプライドの醸成につながる、市民の心を一つに出来る取り組みです。かつて小倉高校が甲子園で優勝したように高校スポーツの強化もその一つですが、課題は生徒数の減少です。人口減っているにも関わらず、高校の数は変わっていないため、各校の定員が少なく、運動部のレベルもバラつきが出ることであり、高校スポーツ活性化の観点からも何らかの検討が必要になってくるのではないのでしょうか。

「みんなが広報マンとなり広報の一翼を」

北九州市は市内外へのアピールが得意ではないように感じます。良いものがあっても届けること、伝えることができなければ意味がありません。メディアが多様化する中、取捨選択ができず情報が埋没しているように感じます。

スマホ時代である現代の情報発信は、アップするだけでなく、対象に届けるためのテクニックがなければ、いい仕事をしていても届きません。非常に大事なポイントです。

市の職員、まちの皆さんが発信に力を入れていき、「市民みんなが広報マン」として広報の

一翼を担うという意識を持つことが重要です。この意識はキャッチフレーズ一つで変わってくることもあるのではないのでしょうか。

その中で、2021年10月に開催された世界体操・世界新体操」は北九州市の良いPRの機会となりました。当時トップ選手であった内村航平氏が北九州市の生まれであったことが非常に大きかったと思います。こうした北九州市の魅力発信が一過性にならないように、仕掛けを次々に打っていくことが大切です。

「市民がワクワクするような夢やビジョン」

アジアに近い北九州市には優位性があり、北九州空港というインフラは活かす必要があると感じます。

これに関連して、大分県では、宇宙ビジネスに力を入れています。北九州市においても、かつて「スペースワールド」があった経緯もあり、宇宙ビジネスは身近で、重要な産業になってくるのではないのでしょうか。必ず成長する産業であり、夢もあるので、この分野で存在感を示せる可能性は十分にあるのではないのでしょうか。将来欠かせない分野になってくるので、国と連動しながら発展させていってほしいと思います。

「スペースワールド」は、我々にとって非常に大きなインパクトがありました。宇宙が遠いものではなく、身近に感じ、親しみやすい印象を持つことができました。この点に着目し、政策として打ち出していても良いと思います。「ワクワクすること」、これがキーワードとなるでしょう。市民を奮起させる夢やビジョンが大切になってくるのではないのでしょうか。

「チャレンジする若者を応援する環境を」

若者が魅力を感じて働ける企業や職種が北九州市には少ないと感じます。例えば弊社主催の男子プロゴルフの大会に協賛頂いている名刺管理アプリ開発の企業は新しいですが、発想

がユニークで、実に元気があります。そのような企業が北九州市で生まれても全くおかしくなく、魅力ある企業がもっともっと出てくることを願っています。

今後は、若者が起業する、新興企業でチャレンジする場を創っていくことが必要で、行政としても支援することが重要ではないのでしょうか。併せて、変化が激しく先の読めない時代ですが、チャレンジする若者を応援する風土の醸成も必要でしょう。そのようにチャレンジできる環境を整えることが、稼げるまちをつくる土台となると考えます。

メディアとしては、それを知ってもらったり、ピッチイベント等で投資を促したりということができないのではないかと考えています。

チャンスの場、マッチングの場の創出により、東京に行かなくても起業できる環境を、行政とメディアが連携しながらつくっていったら良いですね。まだまだ追いつける分野だと思えます。

「チャレンジする・できるまちへ」

「夢と希望と感動」、感情を揺さぶられるものがあるから、「居たい」「働きたい」と思うはずです。使い古された言葉かもしれませんが、一周回ってそこに戻ってくるのではないのでしょうか。

また、自分たちに誇りを持ち、成長できるまちになってほしいと思います。ありきたりなのではなく、他にないような、突き抜けた「チャレンジ」、「アイデア」が必要で、個性を出すことが重要です。

尖らせ、突き抜けたものを打ちだしてほしい。北九州市が話題になって、きっと北九州市民のプライドの形成につながっていくこととなるのではないのでしょうか。

「チャレンジするまち、チャレンジできるまち」の実現に期待しています。